

'88—1

北海道民族学会通信

北海道民族学会

札幌市北区北10条西7丁目
北海道大学文学部行動科学科社会生態学講座内
(011)716-2111内線4163題字：椿坂小籠(點の会所属)
編集：池田透
発行者：岡田宏明
印刷所：(株)北海道機関紙印刷所

国際シンポジウム——○

シンポジウム・北の民族と生活

—人と動物のかかわり—

岡田宏明*

昭和63年2月23日から3日間、網走市で標題の国際シンポジウムが開催された。この会議は昭和61年10月に網走市立郷土博物館創立50周年を記念して札幌と網走で開かれた第1回シンポジウムにつづき、第2回目の国際会議として組織され、また今年度実施設計が予定されている道立北方民族博物館にむけて、北方研究の学術的意義を高めるために企画されたものである。

会議は、第1回目に基調講演と問題提起、第2日目以降は、〈人類学の立場〉、〈生物学の立場〉、〈ヒトと動物の共存〉の3部構成で研究発表と討論が展開された。基調講演には、第1回にひきつづきカナダ・アルバータ大学のM. フリーマン教授をお招きし、「北方採集狩猟民にとって動物とは」と題して話していただいた。人類学と生物学に造詣が深いフリーマン教授は、イヌイト(カナダ・エスキモー)の1年間の生業活動を豊富なスライドを駆使して説明し、永年の調査で培われた洞察によって満場の聴衆を魅了した。

〈第1部〉は、広い視野から北太平洋における海獣狩猟の起源と発達を裏づけたW. ワークマン(アラスカ大)論文をうけて、岡田淳子(北海道大)がアラスカ半島ホットスプリング遺跡における動物の利用について詳細に報告した。ついで、ギリヤーク族の世界観と、トリングット族の神話におけるヒトと動物の深いかかわりを論じた黒田

信一郎(北海道大)と益子待也(金沢女子大)の論文が発表された。この話題については、基調講演や、スチュアート・ヘンリ(目白女子短大)の問題提起との関連で活発な論議がかわされた。

〈第2部〉は、アラスカのチュクチ海と北ベリング海とでは、隣接地域にかかわらず海獣などの資源捕獲量に、長期的にも短期的にもかなりな変動があることを指摘したS. ストーカー(ベリンジア海洋研究所)論文にはじまった。日本側からは、オホーツク海における鯨類の資源量調査を主とする宇野裕之(美幌博物館)、オホーツク文化の海獣猟を各地の出土遺物から分析した西本豊弘(国立歴史民俗博)、ウルム氷期から現代にいたるサケ科魚類の分布と資源量の変動を論じた前川光司(北海道大)の三論文が発表され、ストーカー論文との関連で参加者の興味を湧かせた。

〈第3部〉は、海獣・陸獣・魚をバランスよく利用するチュクチ海エスキモーの生業戦略を分析したS. ブラウンド(ブラウンド研究所)論文をはじめとして、知床半島の動物群集の調査から流水南限に位置するオホーツク文化の生業活動を復元した大泰司紀之(北海道大)、最後に網走における捕鯨共同体の社会構造の分析から、捕鯨がもつ文化的役割の重要性を考察した岩崎まさみ(アルバータ大)の二論文が報告され、ここでも北太平洋の両端の対比が注目をあつめた。

*北海道大学文学部

最終日の総合討論では、小谷凱宣(名古屋大)の問題提起をうけて建設予定の博物館への注文が相次ぎ、また地元網走市の捕鯨共同体にメスをいれた岩崎論文に質問が集中するなど、活発な質疑応答が展開された。シンポジウムの全日程を成功

のうちに終了したのは、安藤市長をはじめ、地元の関係者の方々の熱意のたまものであり、感謝にたえない。関係者の一人としてこの会議を2回で終らせず、3回以後も実現させたいと考えている。

1987年度 第2回研究会発表要旨——〇

パプア・ニューギニア、マレー川上流域 住民の生態

口 蔵 幸 雄^{*}

昭和61年10月から約5カ月間、パプアニューギニア西州の高地住民を対象に、人口動態、生業活動、食物と栄養、成長などをテーマとした人類生態学的調査を行なった。これは、昭和61年度文部省科学研究費海外学術調査(代表者大塚柳太郎、課題名「メラネシアにおける環境の多様性に対するヒト個体群の適応機構の比較生態学」)によるものである。

調査住民は、言語学的にはMountain Ok sub-familyと分類されている。一つのコミュニティは、100人から250人で構成され、政治的な単位となり、それぞれ250平方キロメートル前後のテリトリーを有する。コミュニティは、いくつかの外婚父系クランから構成され、コミュニティ内婚を特徴としている。1960年代前半に行政の影響下に入る以前には隣接するコミュニティ間の戦争が頻発していた。

当調査研究では、4人の研究者がそれぞれ異なるコミュニティに住み込み、決められた項目のデータをとり比較することよりこの地域一帯の全体像を明らかにするという方法をとった。筆者が住み込んだ村落は、標高900メートルから1300メートルに分布し、活動域は標高600メートルから1500メートルの範囲である。焼畑農耕の作物構成はコミュニティ間で少しづつ異なり、標高および隣接する他の言語族の影響がその要因と考えられる。当調査地一帯はタロイモゾーンと呼ばれ、タロイモを主食にしていると言われてきたが、調

査したコミュニティのうち最も低い標高に住むKasanminでは摂取エネルギーの約80パーセントをサツマイモで得ている。タロイモ(*Colocasia* および *Xanthosoma*)の占める割合は6パーセントにすぎない。一方、最も標高の高い所に住むEnkaiakminではタロイモが摂取エネルギーの約60パーセントを供給し、サツマイモの割合が約35パーセントと低下する。両者の中間の標高に住むSeltaminでは、タロイモとサツマイモの割合がそれぞれ約30パーセントと54パーセントであった。このように調査コミュニティの間でタロイモとサツマイモの摂取の相対的重要性には傾斜がみられた。サツマイモの重要度が最も高いKasanminは、早い時期にタロイモからサツマイモへ移行したBiminと隣接し、友好的な関係を維持してきた。Kasanminのサツマイモ偏重はこのような社会・文化的要因も考慮しなければならない。また、サゴヤシやパンノキはKasanminだけが利用している。

以上の他、キャッサバ、バナナ、トウモロコシ、ビットビット(*Setaria palmifolia*)、カボチャ、ヒョウタン、キュウリ、サトウキビ、数種の葉菜、パンダナスなどが栽培されているが、タロイモとサツマイモを除く作物の摂取エネルギーに占める割合は、2~15パーセントにすぎない。

動物性の食物源は、飼育ブタと狩猟で得られる野生動物であるが、摂取量は極めて少ない。ブタは一世帯あたり1~3頭飼育されているが冠婚葬

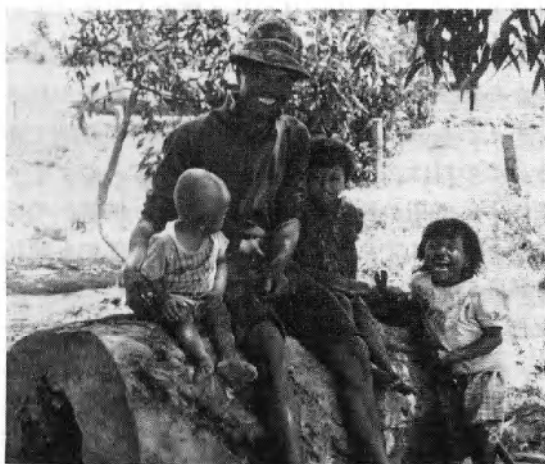
*岐阜大学教養部

祭以外に食されることがなく、ブタを食す機会は年に数度を越えることはない。弓矢を用いた狩猟では、有袋類のクスクス (*Phalanger spp.*) や鳥類が対象である。前者は標高1500メートルを越える高山帯に主に生息し、後者は標高1000メートルを越えると少なくなる。狩猟動物の生息密度の低さを反映して、狩猟の成功率や効率(単位狩猟時間あたりの捕獲重量)は極めて低い。筆者の調査したSeltaminの村落では、鳥類を対象とした猟しか行なわれなかったが、狩猟1時間あたりの捕獲量は13グラムにすぎなかった。

成人男子1人1日あたりのエネルギーおよびタンパク質の摂取量は、体重1キログラムあたりSeltaminの村落では44キロカロリー、0.4グラム、Kasanminの村落では42キロカロリー、0.4グラムであった。WHO/FAOの栄養所要量の基準値(体重1キログラムあたり、46キロカロリー、0.8グラム)と比べると、タンパク質摂取量の低さが目立つ。この低タンパク摂取と、住民の成長、健康、出生率や死亡率のような人口学的パラメーターとの関係について今後検討していきたい。

インドネシアの移住開拓 — ジャワ人の場合 —

染谷 臣道*



最近移住したばかりのジャワ農民とその子供たち。
「娯楽がないのが難けど、他のことでは大体満足しているよ。もとの村に戻ったところでも何もないんだから」と言っていた。
(南スマトラ州のアイル・サレー村で)

ジャワの急激な人口増加は既に19世紀に始まっていた。1815年の調査で450万人だったジャワの人口は、1905年には3010万人に膨れ上がっている。そして更に、1980年には9127万人に達している。オランダ植民地政府はジャワへの過度な人口集中による経済的社会的問題に悩み、ジャワ農民の外島移住開拓を積極的に押し進めた。1905年に155家族をスマトラに送ったのがその最初だと言われている。移住開拓には政府主導によるものと農民の自発的なものの2種類がある。私が1977年から

79年にかけて調査した中部ジャワの農村あたりは比較的豊かだった(それは農業用水の多さによる)ために、政府の移住開拓計画に参加した者はいなかったが、既に開拓に成功している親族を頼って自発的に移住した農民は何人かいた。

今回の調査は来年度の本調査のための調査村の選定を主目的にしたため、かなり多くの村を回らなければならなかった。最終的にはジャワ移住民の関係では二つの村に絞った。一つはパレンバンからスピードボードで2時間ほど下った比較的新しい開拓村で、ここではまだみんなが貧しく、従って階層分化が見られないが、ジャワ人の民族性の一つと言われている宿命感や権威主義、その他伝統的な価値観から解放され、合理主義的思考様式が強いなどの興味深い文化変化を見た。それに対してランボンの近くにあるヨクヤカルタ村(ヨクヤカルタあるいはその周辺の出身者が多いのでこう名付けている)などは1921年に開拓を始めた歴史のある開拓村で、人々の生活はその周辺に広がる見事な水田に支えられている。ここでは階層分化が見られ、伝統的思考様式の再生が見られた。

ジャワ人の移住は人口学的経済的要因によって、いわば、故郷から押し出される形で進行してきたのであって、移住を押し進めるような文化的要因によってではない。そうした点で同じインドネシア人でもブギス人の場合と大きく異なる。

(付記) 本報告は「昭和62年度文部省科学研究費

(海外学術調査)」の助成を受けて実施した調査
〔課題名：インドネシアの移住開拓に見る生活世

界の形成過程，課題番号62042003〕に基づいてい
る。)

インドネシアの移住開拓 — ブギス人の場合 —

伊藤 真*

人口過密と土地不足の問題をかかえるジャワ人が、政府主導型の「計画移住」の代表的な担い手であるとすれば、南スラウェシのブギス人は、「自発的移住」をおこなう代表的な存在である。

ところでブギス人のこうした自発的移住は今日においてのみ見出されるわけではない。オランダ植民地統治以前から、かれらは移住・出稼ぎをいわば「伝統」としており、今日の移住開拓も、そうした伝統の延長上にあると考えられる。

まず、そうした移住の伝統の社会・文化的背景について見ておこう。かれらの社会は、流動性に富む階層社会といわれる。それは、富をもつことが従来から社会的身分を上昇させるための有力な手段であったこと、さらに、かれらの卓越した航海技術と交易のネットワークが外部世界からの富の獲得を比較的容易にしていたことなどにも一因する。実際、外部世界への志向性は、文化の様々な面に表れている。例えば、ラ・ガリゴ叙事詩の主人公で、その生涯を放浪に費す王子サウェリ・ガディンがブギス族の文化英雄的存在であることもその一例である。

歴史的に見ると、ブギス人の大規模な移住はマカッサル戦争(1667—69)の時代に端を発するといわれる。以後、主に交易を目的とした島嶼部各地への移住が続いたが、近年においては、カヘル・ムザッカルの反乱(1951—65)が、かれらの移住に最も大きな影響を与えた。この時期、南スラウェシ全域で反乱軍と国軍との間で戦闘が繰り返され、数万におよぶ人々が戦火を恐れ南スラウェシを去ったからである。

今回の予備調査では、ランブン、南スマトラ、ジャンビの3州を回り、ブギス人の移住開拓地を訪れた。かれらの集落は、大小河川の注ぐスマトラ東岸部に多く、そのほとんどが低湿地にある。

我々が訪れたスンガイ・ロカン村(ジャンビ州タンジュン・ジャブン県)もそうした集落の1つで、州都ジャンビよりスピードボートで約4時間、バタン・ハリ河支流の河口近くに位置する。この村は、ブギス人とムラユ人の血をひく自発的移住者によって拓かれ、以後その人物の呼びかけに応じた者たちにより、徐々に集落が形成された。移住地におけるブギス人に見られる傾向として、その移動性および都市への志向性がある。州都ジャンビからわずか15kmにあるパイナップル栽培の村タンキ・バル(バタン・ハリ県)は、その好例である。この村は、1962年ワジョ出身の17人のブギス人によって拓かれたが、かれらはそれ以前、インドラギリ(リアウ州)やジャンビ海岸部でも開拓を試みている。また、住民の多くは、わざわざ米を作るためにスマトラまで来たのではないという。かれらは換金作物を好み、その利益で都市に土地をもとめる。純農民的をジャワの開拓民と比べて、かれらは商業的農民といえるだろう。(付記 本報告は、昭和62年度文部省科学研究費の助成を得て実施された予備的調査「インドネシアの移住開拓に見る生活世界の形成過程」(課題番号62042003)に基づいている。)

編集後記

「通信'88—1」をお届けします。本年3月末には、転出による会員の異動がかなりありました。事務局の菅原和孝が京都大学教養部に、口蔵幸雄が岐阜大学教養部に転出。また運営委員の染谷臣道は九州工業大学、岡田淳子は北海道東海大学に移りました。ただし、事務局は当然従来通りとし、新任の池田透助手が担当します。

*帯広畜産大学